

## 馬の大型絵画を通じた、 日英間の馬文化交流

三宅洋子



三宅洋子（みやけ ようこ）

東京都生まれ。蹄跡代表。一般企業での勤務を経て、馬に関わる仕事を希望し乗馬用品店に就職。北海道の馬産や育成、海外での馬術イベントや芸術などの馬文化を学ぶ。国内において2017年から4年間、都市部での馬のイベント執行に携わり、2019年からの2年間は仮設馬場の運営にあたる。退職後、世界と日本の馬事文化の交流を目的として活動をしている。

### 馬の絵画を通じた文化交流

2023年4月24日、日本の馬の肖像画を描く画家、長瀬智之氏の作品（図1）が、はるばる海を渡り、作品のモデルである Household Cavalry Mounted Regiment (HCMR, 王室騎兵連隊) に寄贈された。王室騎兵連隊によると、今回の寄贈は英国外と民間と初めての交流、かつ貴重な機会である故、大歓迎された。

寄贈まで国内外において、さまざまな試行錯誤や調整を繰り返しての取り組みとなったが、寄贈当日は馬を介し共通の認識を持つ者同士、垣根はなく、国や所属を超えた連帯感すら生まれ、無事、寄贈を執り行うことが出来た。

寄贈された作品は、去る2022年、公益財団法人馬事文化財団が運営する東京競馬場内のJRA競馬博物館で4月から8月まで、特別展として「長瀬智之展・肖像画に生きる永遠の名馬たち」の開催に伴い、イベントホールで行われたライブペイントで制作されたもの。

JRA競馬博物館内のホールで制作工程を一般客に公開しながら、期間中に毎日、大型作品を描くケースは極めて稀なケースで、多くの注目を集めた。

この作品が英国へ渡るまでの経緯と、現地における寄贈の様子を伝える。

### ライブペイントとは

広く一般では、イラストレーターや書家によるライブペイントはあるものの、油彩画のライブペイントは非常に珍しい。まずキャンバスに下地を塗り、その上から幾重にも油彩絵具を重ねる、極めて時間のかかる仕事だからだ。馬の画家では日本初の試みである。

来館者は、普段見ることはできない、画家が油彩画を描く姿を、ライブでごく近くで鑑賞できた。一方、画家は、衆人環視の中で描くというプレッシャーを感じる以上に、ライブペイントの意義に並々ならぬ熱意を抱いていた。「自分がこの場で実際に油彩画を描いて



図1. 作品タイトル：《暁光》～ The Light of Dawn ～  
サイズ：縦 1,800 cm × 横 5,500 cm 油彩画 (Oil Painting) 支持体：キャンバス 額装：金色アルミフレーム

いる姿を公開することで、このように馬が描けるものなのだ、私もいつか馬の絵を描いてみたい、と誰かに感じてもらえたならば、それが今後の日本の馬事文化の発展につながっていくはずだ」という強い信念が、画家を奮起させていた。

その題材は、ほかならぬ王室騎兵連隊。2008年、自身が初めて連隊の馬に出逢い、帰国の途についたヒースロー空港で、突如「降りてきた」構図。それは「周囲がまだほの暗い中で、等身大の連隊の馬達が織りなす厳かな隊列」であったという。

この特別展「長瀬智之展・肖像画に生きる永遠の名馬たち」は、コロナ禍で当初の予定から3回ほどの延期を繰り返していた。馬事文化財団関係者の粘り強い取り組みにより、2022年春の開催が無事決定されたが、開催が延期されるたびに特別展の展示スペースの変更が余儀なくされた。それが功を奏し、2022年にはJRA競馬博物館のイベントホールの使用許可が下りた。普段は観覧客を入れ、トークショーや公開録画も行われるほどの非常に広いホールである。そのような広いホールを使えるのならば、展示だけでなく何か特別なことをお見せしたいと検討を重ねた結果、前述の等身大に近いサイズの彼らを描くライブペイントの実行に繋がったのだった。

特別展の開催期間中は、来館客の安全を考慮し、キャンパス周辺には結界が張られたが、毎日画家が約600号相当という大きなキャンパスに向かい黙々と筆を走らせる姿は、多くの来館者の注目を集めることになった。日々作品が出来上がっていく様子が興味深く、毎週末、ライブペイントの進捗を記録撮影し、鑑賞を楽しむ来館客もいたほどだ。

この巨大な作品には、何万もの筆が入っていて、加筆と乾燥を何度も繰り返し、ようやく馬の重厚感や皮膚感、馬体の奥行などが表現できたのだという。

そして約4か月間の制作期間を経て、2022年8月、ようやく巨大な作品が完成に至る。完成披露会も開催され、JRA競馬博物館での一般へのお披露目を経た後、作品の保護と補強を目的としてアルミ製の額装が施された。

英国の王室騎兵連隊が闊歩する静かな夜明け、そして、絵画を通じた日英の文化交流の幕開けをイメージして描かれたその作品は、《暁光》～The Light of Dawn～と名付けられた。

## 寄贈までの道のり

寄贈先の選定は困難を極めた。作品の英国寄贈は、「馬の絵画を通じて日英の文化交流に尽力したい」といった画家の念願によるものであったが、2022年9月エリザベス女王IIが崩御。英国とは連絡が取りにくい環境が続いた。国内外の様々な可能性や数々の関係先を当たったものの、作品の最大の魅力であり、かつ最大の特徴でもあるその巨大さが、逆にボトルネックとなってしまう。当初話が進んでいた展示場や、ロンドン市内のアートギャラリーへは搬入さえも難しく、また他の展示スペースの確保も極めて困難との判断になり、寄贈プランは、一度暗礁に乗り上げた。

この困難から我々を救ってくれたのは、世界三大ホースショーの一つであるオリンピック・ホース・ショー（英国・ロンドン）における出展経験であった。2度目の出展となる2019年、エキシビジョン・マネージャーであるパム・スウィフト女史が、当時、日本からの唯一の出展者であった私共を大変懇意にしてください、ポニー競馬では馬場内に入場させてくれ、また王立騎兵連隊が演じるミュージカル・ライドというショーの演目を埒沿いで鑑賞させてくれたりと、特別な招待をしてくれたのだった。

ミュージカル・ライドの演目は、日常ロンドン市内で儀仗を行う厳かな隊列の雰囲気とは全く異なる。音楽や照明のたかれた華やかな会場で歓声に動じず、懸命に演技する馬の呼吸音、馬具の装飾金具が鳴る音、躍動する馬の蹄音、弾ける馬場砂を、画家は誰よりも近くで感じた。画家は、女史の厚意に痛く感激し、馬達の姿を目に焼き付け、その感動を心に刻んだ。それ以来、ヒースローで見た構図がますますリアルになり、画家を一層、制作にかり立てた。

2022年11月、筆者から彼女に完成した《暁光》の画像を添付し、画家の最近の活動報告をした。すると実は、彼女の祖父は作品のモデルである王立騎兵連隊の教官であったことを聞く。この縁に恵まれ、作品のモデルとなる王立騎兵連隊の、ジャイルズ・ステイツベ近衛騎兵財団理事、およびトーマス・アーミテージ中佐と直接繋がること出来た。

早速、筆者から中佐に、この作品の制作経緯、仕上り画像、額装やサイズ等の仕様、そしてなにより絵画を通じた日英の馬事文化交流という作品寄贈の目的を伝え、また日本から現地までは繊細な油彩画ゆえ温湿



図2. ジェレミー大尉ほかブルーズ・アンド・ロイヤルズ隊員（騎馬隊）と、JRA ロンドン事務所草野所長，日本側関係者

度管理ができるリーファーコンテナを使用するといった安全な運送方法についても言及した。

トーマス中佐は、作品のインパクトやクオリティに加え、画家の「馬」への強い想いとそのチャレンジ精神、それをサポートする今回の文化交流に対する支援制を強く賛辞された。

そして、英国の王立騎兵連隊に、作品を寄贈することが決定したのだった。

### 寄贈レポート

2023年4月24日、ロンドン・ハイドパークの英国王室騎兵連隊において、JRA ロンドン事務所所長草野様・主査大野様のサポートの元、日本から長瀬智之氏・伊藤和彦氏（輸入コンサルおよび現地作業補佐・株式会社グランドフリート代表）・福富朗氏（運輸担当・株式会社横浜海陸商会）・三宅洋子（蹄跡代表）が赴き、寄贈の立合いを行った（図2，3）。

当日は、チャールズⅢの戴冠式の直前であったにもかかわらず、王室騎兵連隊は我々を快く招き入れてくれた。多くの隊員から「日本から絵画がプレゼントされることを聞いているよ」と気さくに声をかけられ、連隊にとってこの企画が大変珍しいことを、改めて思い知る。

また当日は、特別に厩舎や装蹄所，馬具庫や衣装庫を案内していただけただけでなく、今回の寄贈と訪問を歓迎され、20名程の幹部と昼食会も開催された。会



図3. 右：トーマス・アーミテージ中佐 左：長瀬智之氏  
英国王室騎兵連隊 トーマス・アーミテージ中佐からのコメント  
「このような素晴らしい絵画を寄贈いただき、長瀬画伯には心より感謝申し上げます。我々にとっても英国外の民間の方々とのようなイベントを執り行うことができたのは初めての経験で大変嬉しく思います。また、このような取り組みが、日英両国のさらなる馬事文化交流につながることを願っております。年内のどこかで正式な式典（除幕式）を企画したいと考えています。その際は、今回の活動をサポートされたお仲間と共にぜひご列席ください。」

食にはフランス陸軍の幹部も招待されており、馬が他国軍隊との交流に役立っていることを実感した。

### イギリスの馬文化、王室騎兵連隊とは

王室騎兵連隊は、英国陸軍の2つの最上級連隊、赤い制服のライフガードと、黒い制服のブルーズ・アン

ド・ロイヤルズで構成されており、この2つの連隊が、毎日交代で市内の儀仗を務めている。儀仗を担当する連隊は毎朝、王室騎兵連隊にて、馬装点検・馬上点呼を行う。その後、約3.2 km先へのホース・ガーズ・パレードまで、約20分かけてパレードを行い、朝11時から別の隊と交換式を行う。このホース・ガーズ・パレードでの交換式の様子は一般公開されており、観光名所ともなっている。バッキンガム宮殿での衛兵交代式と共に、ロンドン観光で目にした人も多いのではないだろうか。

なお、今回の寄贈作品“The Light of Dawn”のモデルとなるのは、黒い制服のブルーズ・アンド・ロイヤルズであるが、その長は、今回のチャールズⅢの戴冠式で、王族で唯一馬に騎乗した、アン王女である。アン王女は、戴冠式前日に厩舎を訪れ実際に騎乗する馬に会い、また戴冠式では、国王の馬車に従い、約6,000人の隊列を率い軍服でパレードを行ったことも記憶に新しい。

## 総括

競走馬の肖像画の文化は、一説には英国発祥のものといわれている。写真機がない時代、偉大な功績をおさめた馬の栄誉を称え、その雄姿を後世に遺すことを目的とした馬主が、画家に制作を依頼したことが起源らしい。1点は自分の手元に置き、もう1点はジョッキークラブに寄贈すること。それが、英国ジョッキークラブ会員としての最高の名誉とされたといわれる。

英国王室騎兵連隊として、英国外の民間との交流は初の試みとなったが、今回の日英馬事文化交流事業における大きな収穫の一つとして、日本でも競走馬または馬の雄姿を絵画で遺そうとする文化があることを、英国の関係者に認知してもらえたことが挙げられる。

英国で馬の絵画と言えば、ジョージ・スタップスやアルフレッド・マニングスなど著名な作家が数多く存在する。

また、英国において日本の競走馬の知名度は極めて高い。世界の主要なレースに出ている日本の馬の名前を言えば、ほとんどのホースマンは知っている。日本の競走馬が世界の舞台で活躍していることを改めて実感した。

一方、日本で馬の肖像画を描いている画家がいる、またそのように絵画で馬の姿を残すといった馬事文化の継承があるということは、残念ながらあまり知られていない。

今回関係者が現地に赴き、現場で交流をもったことで、日本でも馬専門の画家として油彩画を制作し、それを日英の文化交流に役立てようと活動していること、またそれを支援する馬事文化の普及への取り組みを、深く理解してもらえたのではないだろうか。

競走馬の肖像画を通じて、また今回寄贈した絵画《曙光》を通じて、英国が日本を自国に共通する文化を持つ国として認識してくれることを切に願う。

また、これを機に日英の馬事文化の交流が継続し、発展させていくことが、日本においても、馬とのより幸せな世界の実現や広がりにつながるはずだ。

今回の寄贈に関しては、粘り強く特別展の開催に尽力して下さった公益財団法人馬事文化財団関係者様、英国と幾多の調整をしてくださったJRA国際部様、また現地においてはJRAロンドン事務所所長草野様をはじめとし、大変多くの皆様から励ましやご支援のお気持ちをご厚情に改めて深く感謝申し上げます。

今回を貴重な一つの契機として、皆様から頂戴したご支援に更にお応えできるよう、今後もご協力を賜りながら、日英の馬事文化交流を継続していくことが重要だと強く感じている。

最後に、この度、公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会の支援事業を通じ、JRAの特別振興資金事業を受け、寄贈が滞りなく執り行うことが出来ましたことに、心から御礼を申し上げます。

## — 画家プロフィール —

長瀬智之（1961年生まれ）は、同志社大学ラグビー部で大学選手権3連覇を達成したメンバーの一員として大学生活を送ったのち、イラストレーターとして就職。その後、シンザンに会ったことをきっかけに馬専門の油彩画家としての道を進む。2019年にロードカナロア、2021年にキタサンブラックの顕彰馬肖像画をJRA競馬博物館に納める。また、近年の競走馬では、アーモンドアイ、コントレイル、クロノジェネシス、リスグラシュー、グランアレグリア、ラヴズオンリーユーなど数々の名馬の肖像画を手がけている。2023年12月、自身3度目となるロンドン・インターナショナル・ホースショーの出展を予定している。